
WORKING! ?

橘天龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WORKING!?

【Nコード】

N1987M

【作者名】

橘天龍

【あらすじ】

俺こと小鳥遊宗太は朝起きたら女の子になつてた。しかも金髪幼女。いくらちっちゃい子が好きだからって自分になることないだろう？

WORKING!!の二次創作作品です。性転換物ですので、苦手な方はブラウザバックをお願いします

第1話

とある朝。

『ん…ん…ん…』

俺こと小鳥遊宗太はいつもの時間に目を覚ました。

…ん？気のせいか？なんだか妙に部屋が大きくなったような気が…

…？髪の毛？しかも金色？梢姉さんの悪戯か？しょうがないなまったく…

『痛っ！』

なんだ？この痛みはカツラじゃない？これはいつたい…

俺はベットから降りようとして足元を見る。

『白くて細い…？…何か声も変だ』

何だか某アニメの語尾に【による】を付けるキャラの声に似ている。

俺は慌てて部屋を出ると真っ直ぐ脱衣場の洗面所へ向かう

まさか…まさか！

『……………』

そこには。

驚きと絶望が入り混じった金髪の少女が俺を見ていた。

俺？俺少女になってるの？

いくらちっちゃい物が好きだからって自分になることないだろ。

いやいや、まてまて。小鳥遊宗太。こんなのが現実なわけない、これは夢だ。そうに違いない。

「お兄ちゃん？」

この声はなづな！？マズイぞかなりマズイ！

こんな現場…

「こんなところ…で…？」

なづなとエンカウント。

『お…おはよう、なづな』

俺はプリティーボイスと引きつった笑顔で挨拶する。

「…え…と、お嬢ちゃん、どなた？」

うん、至極まっとうな反応だぞなづな。…って感心してどつする俺。

「なんでお兄ちゃんのパジャマ…まさか！」

やな予感がする。

「お兄ちゃんがいくらちっちゃい物好きだからって拉『違う!』」

「え?」

『いいかなづな。俺は小鳥遊宗太、お前の兄だ』

とりあえず言っちゃった

それから俺は家族しか知らないことや、なづなと二人だけの秘密を語ると驚愕していた。

『朝起きてたら女の子になってた』

どこのテンプレでもよくある台詞を俺が吐くとなづなは困惑した顔をした

「ホントにお兄ちゃん…なの?なんでそんな姿に…」

『俺にもわからん。起きたらこうなってたから説明しようがない』

俺は後頭部をかいた。サラサラした髪の毛の質感が指に伝わる。

『……………』

試しに胸に触れてみた。年相応にペタンコだ。…次に下をおそるおそる覗くと…やっぱりなかった。俺のシンボルが。

「お兄ちゃん…?」

俺の行動を不審に思ったのかなづなは尋ねる

『ただの状況確認だ。気にするな』

「そっか」

『それより…どうするか。こんな姿じゃ学校にもバイトにも行けな
いぞ』

「学校はともかく、アルバイトは大丈夫じゃないかな」

『は？なんでだ？』

「だってあの人達だから」

2話に続く

第1話（後書き）

次話からあの人達とエンカウントです。

宗太の運命はいかに？

第2話（前書き）

原作情報を調べたら、宗太の妹の名前を間違えてました

読者様、ファンの皆様、申し訳ありませんm（――）m

第2話

『いくらなんでも…いや、ありえるかも…』

「でしょ?」

『仕方ない、状況がこうなってる以上どうしようもないからな。とりあえず午後から行ってみる。なずな、昔着てた服とかないか?』

「あるけどどうし…あ、そうか。今のお兄ちゃんは服着られないもんね」

『ごめん、とりあえずなずなのを借りて当面の服を確保してくる。もし元に戻ったとしても近所の子にあげれば無駄にはならないからな』

「うん、ちょっと待っててね」

なずなは自分の部屋に帰っていった

とりあえず状況を整理しようか。朝起きたら女の子になってた。しかも金髪の美少女。昨日は普通に過ごしてたから何かしら食べたり飲んだりで変化した線はうすい。

そうなれば姉さん達やなずなにも被害が及ぶはずだ

後の可能性は…薬を盛られた?いや、それ以前に性別が変わる薬なんてありえない。そんなのがあつたら世界中の性同一性障害や性転

換の手術をしたいと思ってる人達が喉から手が出るほど欲しいはずだ。そんな稀少価値が高い物が俺なんかのために使われるだろうか？

…いや、あり得ないな

あーだこーだと推論の枠から出ない理屈を考えているとなずなが戻ってきた

「お兄ちゃん、おまたせつ。」

『おいなずな、その服…』

俺のトラウマが蘇る。あのバカ親に着せられたことのあるピンクのフリフリ服だ。

「ごめんね、今のお兄ちゃんにサイズの合う服ってこれしかなかったの」

『なんでこれだけ…』

「お父さんの形見だから遺しておけて、お姉ちゃん達が」

なずなの言葉に俺はうなだれた

「でも！今のお兄ちゃんなら凄く似合つとおもっなつ。」

俺はさらに落ち込んだ

『…はあ…。姉さん達はいないんだよな？』

俺はなんとか気を取り直して姉達の所在を尋ねる。これ以上今の姿でエンカウトしたくないからな

「うん、一枝お姉ちゃんは仕事、泉お姉ちゃんはお部屋に籠って滅多に出てこないし、梢お姉ちゃんは帰って来てないよ」

『梢姉さんの場合は朝帰りなんじゃないか？店で酔いつぶれてとか…』

「ありそうだね…」

2人で溜め息をつく

『…しょうがないな。とりあえず新しい服を買つまでは我慢するか』

「頑張つてね、お兄ちゃん」

妹よ。何を頑張れと？

かくして俺は自室に戻り、トラウマの元とも言えるあの服に着替えた

…不本意ながら、女装の経験がこんな形で生かされるとは。

俺は鬱な気分になりつつ着替えを済ませた

3話へ続く

第2話（後書き）

次話予告。

宗太こと、ことりちゃん、初めて（女の子として）のお買い物。

第3話

「やっぱり似合うよ！お兄ちゃん、とっても可愛い」

『…俺は嬉しくない』

着替えを済ませ、部屋を出ると廊下で待ち構えていたなずなが開口一番でそつのたまった

「可愛いと思うよ？ほら。」

なずなが手鏡を渡す。俺はおそろおそろ覗くとピンクの服を着た金髪少女が見返していた

……俺だが。

自分が自身の好みの範疇に入っているのが凄く嫌だ

『…とりあえず行ってくる』

俺はげんなりしつつ手鏡を返すと、交換に赤いポシエットを渡された

『…なんだ？これは』

「何って見ての通りのポシエットだよ？」

何を当たり前なことを？と言わんばかりの表情で妹は見ていた

『そうじゃなくて…なんでこれを俺に渡すんだ？』

「可愛いから？」

なんで疑問系なんだ

「それにお財布とか入れたらいいんじゃないかな。その服、お兄ちゃんのお財布入るポケットないから」

『そついえばそうだな。でもこれは…』

「嫌ならクマのヌイグルミ型のリュックも『これでいい』そつかあ

…」

妹よ。なぜ残念がる？

かくして俺は付いていきたがる妹をなだめ、外出した。ちなみに靴も妹がどこからか発掘してきたバカ親の形見の赤い靴だ。

似合いすぎてる自分に嫌気がさしてくる。

それにしても、歩幅が小さくなったからえらく体力を消耗する…

『ひい…はあ…』

しかもこの服、見た目重視だから歩きづらいことこの上無いし。

「あれ？お嬢ちゃん、大丈夫？」

なんと意外なところ（商店街入口付近）で相馬さんとエンカウト。

『そ、相馬さん!?!』

「あれ? キミ、どうして僕のことを知ってるのかな?」

…しまった。今の俺は相馬さんからすれば初対面だ。

だが人の弱みを握るのが得意な相馬さんはそんなことを見逃すはずもなく。

「ん? その服どこかで見たような…」

マズい。ここは逃げなければ!

俺は悩む相馬さんを尻目に逃げ出すが。

『ひゃっ!?!』

歩き慣れない服で転倒する。見た目だけでなく心まで幼くなっているのか、それだけで泣きそうになる

「!?!? ちょっとお嬢ちゃん! 大丈夫かい!」

相馬さんが駆け寄ってくる。逃亡失敗。

「それでお嬢ちゃんはこんなところで1人かい? お父さんやお母さんは一緒じゃないのかな?」

相馬さんが俺の目線に合わせて話しかけてくる。

ちなみに今の俺の身長は先輩より低い。ほとんど小学生、下手したら幼稚園児に見えるくらい幼い。

『ええと…今から服買いに…』

段々慣れつつある、プリティボイスを発して答える

「一人でかい？偉いね。良かったらお兄さん、仕事までまだ時間があるから一緒に付いて行ってあげようか？」

『い、いえ、一人で大丈夫ですから』

「子供が1人では危ないよ。大丈夫、お兄さんにまかせて」

いつものスマイルを見せながら相馬さんが言う。

『…わかりました』

俺はげんなりしながら承諾する。これ以上拒否しても怪しまれるだけだろうし…

「決まりだね。この先に子供服の安いお店があるから、連れて行ってあげるね」

『お願いします…』

俺はしぶしぶ相馬さんについていった

4 話へ続く

第3話（後書き）

意外な人に出逢いました。ことりちゃんの運命はいかに？

次話予告。

ことりちゃん、相馬さんと初デート（笑）する

お詫び。

1話の後書きであの人達とエンカウトと書きましたが、話の構成の都合上出来ませんでした、申し訳ありませんm（――）m

設定（前書き）

今さらですが、こじりちゃんのプロフィールです

設定

名前：小鳥遊ことり

声のイメージ：松岡○貴

身長：種島ぽぷらより顔半分ほど低い

容姿：金髪ロングヘアをウェーブしていて腰まで。蒼い目に白い肌と見た目は外国人その物。体型は幼児体型（でも胸はまひるより大きい）

備考：小鳥遊宗太が突如性転換した姿。見た目も声も完全に別人なために宗太だと気付くものはいない（一部の人物を除く）
とある事情からワグナリアの新人バイトとして改めて入ることに。
設定年齢は16歳（見た目的に無理があるが、ぽぷらの前例もあるためにあっさり決まることに）。

第4話

「ところで…なんで僕の名前を知っていたのかな？」

『え、あの…』

「お嬢ちゃん、名前は？」

『えと、小鳥遊そう…じゃなくてことり』

「へ〜、ことりちゃんって言うのか〜ん、小鳥遊？」

……………しまったあああ！思わず以前に伊波さんに頼まれて女装した時の偽名を名乗ってしまったあ！

「…なるほど。以前の小鳥遊君が付けた偽名はモデルがいたのか。いや、納得」

…へ？

「たしかにことりちゃんは小鳥遊君が好きそうなタイプだからねえ」

相馬さんは何か勘違いをしているようだ。ま、当然か…今の俺は別人だからな、見た目だけは。

「それで、ことりちゃんと小鳥遊君はどういう関係なのかな？どうみても外国人だから妹ってわけじゃないよね？小鳥遊君の家族はお姉さんが3人と妹さんが1人のはずだから」

…いつの間に調べたんだろう。この人はマジで怖い

『ええと、従兄妹です』

「でも外国人みたいな容姿をしてるのは？」

『お母さんがイギリス人なので』

とりあえず相馬さんの質問に嘘八百ならべて答えた

「なるほどね。その服は小鳥遊君のお下がりだったんだね」

やっぱり覚えてたのか

「ことりちゃん礼儀正しいね、年は幾つ？」

『16歳です』

相馬さんが凍りついた。

…って、またやっちゃったあああ！このナリで16はないだろ俺！

「そっか…世の中には色んな人がいるからねえ」

相馬さんが復活した

…なるほど、身近に先輩みたいな実例がいるからそれほど驚きじゃないのか

それから相馬さんに連れられて子供服の安い店につき、店の店員さんに今の俺に似合う服を見繕ってもらい、そのついでに試着室で購入した服を身につけた。

手慣れてしまったなあ…

心の中でげんなりしつつ、青地のプリーツスカート（残念ながらシヨートパンツやジーンズ系はサイズがないので諦めた）に白いキャミソールをインナーにし、セーラー服風の上着と言う女子校生の制服みたいな出で立ちになった

ちなみに胸はペタンコかと思われたがそれなりにあったので可愛いらしいデザインのブラも身につけている。下も見た目に合わせたカボチャパンツではなく、普通の白い柄のやつだ

試着室備え付けの姿見で見惚れてしまった自分に憂鬱な気分になっていると

「ことりちゃん、もういいかい？」

まだいたのか、相馬さんがカーテンの外から声をかけてきた

『え、あ、はい』

「うん、とても良く似合ってるね。可愛いよ」

『…ありがとうございます』

可愛いという言葉に再び憂鬱な気分になると、相馬が俺に水兵さんが被りそうな白いベレー帽のような帽子を頭に載せた

『え、あの』

「その服だとそれが似合うかなと思って。あ、これは僕からのプレゼントだから」

『でもそういうわけには』

相馬さん、なんでこんなに優しいんだ？

「じゃあ…そうだね、お近づきのしるしに」

相馬さんがウインクする。やめる、気色悪い

帽子の件はこれ以上言い返しても聞きそうにないので諦め、服代まで払おうとするのを何とか言い聞かせてして納得させ、店に来る前に着ていた服と替えの服と下着数点を入れた服を紙袋に入れ、店を出ると

きゅるるる〜

と可愛らしい音が鳴る。ちなみに俺の腹の虫の音だ…そういえば起きてからなにも食べてなかったな

「そろそろお昼時だしね。何か食べようか」

そういつて連れていった先は、

「……………」

俺のバイト先のワグナリアだった

5話へ続く

第4話（後書き）

相馬さんにプレゼントされたことりちゃん。相馬さんはそんな趣味が？（笑）

次話予告

ことりちゃん、ワグナリアであの人達に会う。

あまり期待しないで読んで下さいm（――）m

第5話

八千代「いらっしゃ…あら、相馬くん」

相馬「どうも轟さん。今はお客さんですよ」

八千代「あらそうなの？…あら？あらあら？」

チーフが俺にロツクオン。

ちなみに俺は入店してからずっとフリーズしていた

八千代「相馬くんの彼女さん？」

相馬「違いますよ。道端で困っていたのを助けただけです。小鳥遊君じゃあるまいし、そんなことあるわけないじゃないですか」

やだなあと朗らかに笑う。

おい。俺はロリコンじゃない、ちっちゃいものが好きだけなんだ！

…今は俺自身もその範疇だったな…なんだか悲しくなってきた

八千代「お嬢ちゃんは名前なんて言うの？」

『…た、小鳥遊ことりです』

相馬さんにはこの名前で名乗ってしまったので素直に名乗る。

八千代「小鳥遊？」

相馬「小鳥遊君の従兄妹だそうですよ」

チーフの疑問顔に相馬さんが捕捉する。

八千代「あら、そうなの？外人さんみたいだけど…」

相馬「お母さんがイギリス人だそうです」

再び相馬さんが捕捉する。チーフがいつものおっとり口調で納得する

きゅるるる〜

再び俺の腹の虫がなると相馬さんとチーフがクスクス笑っていた

なんだか死にたくなる…

八千代「こちらの可愛いお客様が大変お腹を空かしてらっしゃるのでお席にご案内しますね」

チーフがニコニコしながら席へ案内する

…気のせいかな？やたら他の客に注目されてる気がする。

「ねえねえ、あの子可愛くない？」

「本当、お人形さんみたい」

「なあ、あの子めちやめちや萌えねえ？」

「ああ、妹にしたいくらい萌えるぜ……」

俺を萌えキャラにするな

視線の集中砲火を浴びて、自殺したくなるほど鬱な気分になりつつ
チーフに案内された席に着く。

……座ったら足が微妙に浮いていた。

本当に嫌になる……

相馬「……で、何にする？誘ったのは僕だし奢らせてもらっよ？」

本当に相馬さんは優しいな。一体どうしたんだろうか？

『でも悪いですよ』

相馬「いいからいいから。僕は実はこの店員でね、ある程度お金
に融通利くから心配しなくても大丈夫だよ」

知ってるけどな。そもそも同じ店員だし

『……じゃあ、お言葉に甘えて、ハンバーグセットとデザートにスト
ロベリーサンデーを』

なぜかデザートまで頼んでしまった。精神まで女児になってしまっ
ているのか？

俺は再び頂垂れた

相馬「りょうかい。轟さん、ハンバーグセットとストロベリーサンデー。僕はアイスコーヒーとカルボナーラね」

八千代「はい、畏まりました。少々お待ちくださいね」

相馬さんがなぜか嬉しそうに注文し、チーフが同僚故のマニュアルを崩した挨拶で注文を受け取る。

俺は手持ちぶさたに足をブラブラ揺らす。

…何だか少しずつ幼女化していつてるようでかなり嫌だ。それに無意識に幼い言動をしてるし…

相馬「何だか元気ないね。どうしたんだい？」

『いえ、何でもないです』

「そうかい？ならいいんだけど」

俺は喉が渴いたので水を飲むが、自然と両手持ちで飲んでいることに鬱になる

八千代「お待たせ致しました、こちらハンバーグセットとストロベリーサンデーとなります」

チーフが俺が注文した物から持ってきた。俺がお腹空かしていたのを見越してのことだろう

相馬「遠慮なくどうぞ」

『い、いただきます』

相馬さんに軽く会釈してから食事に取りかかる。…うん、美味しい。佐藤さん、いい仕事してるね

相馬「…それで、キミが16歳だって言うなら…学校はどうしたのかな？」

『え、その…』

ヤバイ、説明できる言い訳が思いつかない…

八千代「もしかして日本に来たばかりなんじゃないのかしら？」

相馬「そのわりには日本語はお上手ですよ」

やはり話すべきなのかな…でも、なあ…

俺はどうすべきかチーフと相馬さんの話を聞きながら言い訳を考えていた。

6話へ

第5話（後書き）

次話予告。

ことりちゃん、苦悩する。

予定は未定です（え）

第6話

『あ、あのー!』

俺は意を決して2人に声をかけた。

相馬「なんだい、ことりちゃん」

八千代「どうかしたの、ことりちゃん」

『あの…ここで、働きたいんですけど…』

相馬「学校は？」

『えと、色々事情があつて…今は行ってないんです』

嘘は言っていない。正確には【行けない】だが。

八千代「どうしましょう?杏子さんに相談してみますね」

チーフが慌ててバックヤードに戻っていく。

相馬「いいのかい?こちらとしては種島さんと並んでそっち趣味の客が増えて店の売り上げが上がる見込みができるから問題ないけど」

先輩はともかく、俺は嫌だけどな。

とにかく、本来なら学校に行っている時間を使ってフルタイムでバイトできれば家計も助かるし。

そういえば…今はいいとしても、男の俺こと小鳥遊宗太のことはどうするか。

なずなは話したが姉さん達にも本当ことを話して、口裏合わせてもらって母さんの仕事のサポートに行ったということにしてもらうか。そう考えているとチーフが戻ってきた

八千代「とりあえず杏子さんがことりちゃんに来てもらって」
店長と話すネタができたからか少し嬉しそうだった

『あ、はい。分かりました』

食べかけにしていたハンバーグセットとストロベリーサンデーを平らげてチーフと一緒にバックヤードへ向かう。ちなみに相馬さんは注文したものがまだ出来ていないので待たざるをえなかった。

佐藤さん、注文した人が相馬さんだって分かってたのかな…

俺がチーフに連れられてバックヤードに入ると、店長が相変わらずの偉そうな姿勢で椅子に座っていた。

杏子「お前が小鳥遊の従兄妹か？」

『あ、はい。小鳥遊ことりです』

杏子「まあ、そこに座れ」

『あ、はい』

俺は店長の向かいの椅子に座った。…ちゃんと座るとやっぱり足が着かないな…

杏子「八千代、お前は仕事に戻れ」

八千代「あ…はい、杏子さん」

チーフは俺の採用の合否が気になっていたようだが、店長が好きなチーフは言うことに断ることが出来ず苦笑いをしながらフロアに出ていった。この時間だと先輩や伊波さんは学校だしな。山田は…役に立たんだろうし

杏子「……………」

店長は無言で俺を見据えていた。かなり怖い。

それから唐突にとんでもないことを言い出した

杏子「採用するものにも、お前はうちの店員だろうが。小鳥遊」

『…え?』

いま…なんと?

杏子「お前は小鳥遊宗太だろう?どうやってその姿になったかは追及するのも面倒くさいが」

それでいいのかよ

杏子「で、その姿だと誰も信用しないから、いつそのこと別人として生活していく…といったところか？」

『は、はい…』

店長すげえ。なすなでもわからなかったのに

杏子「で、私以外に正体の知る者は？」

『今のところは妹だけです。帰ったら姉にも知らせますが』

杏子「そっか。お前は仕事ができるしな、別人として採用を認めてやる」

『あ、ありがとうございます！』

俺は立ち上がってお辞儀する

杏子「で、希望の時間帯は？」

『なるべくならフルタイムでお願いします。この姿だと学校はいけないので時間が余りますから』

杏子「わかった、八千代と話し合っ^て決めておく。毎日フルタイムは無理だろうがな」

そっか、この身体じゃな…

『ところで、1つ聞いてもいいですか？』

杏子「なんだ？」

『なんで俺が…小鳥遊宗太だってわかつたんですか？』

杏子「…雰囲気、だな。以前に女装したお前の気配に似てたからな
気配って…この人はすごいんだかすごくないんだか分からないな

杏子「とりあえず、仕事は明日からだ。八千代とシフトの調整をせ
んといかんからな」

『分かりました』

こうして今の俺、小鳥遊ことりは新人バイトとして改めてワグナリ
アに働くことになった。

7話へ

第6話（後書き）

次話予告。

ことりちゃん、いじられる（笑）

店長なにげに凄いです

第7話（前書き）

更新遅れましたm(_____)m

第7話

俺が席に戻ってくるとチーフと相馬さんが談笑していた

話してていいのかよ。

八千代「あ、ことりちゃん。で、どうだった？」

相馬「僕も知りたいなあ」

『あ、はい。明日から働けるようになりました。細かいシフトはチ
ーフさんと相談して決めると』

まだ勤めてないし、役職も言っていないからチーフ呼びはまずいだろ
うと判断して名字で呼ぶ。

ちょっと違和感があるな…

八千代「杏子さんが私と？どうしようかしら」

いや、俺のシフトの打ち合わせだからね？

相馬「そっか、じゃあこれからは同僚だね。改めてよろしく」
相馬さんが右手を差し出してきた。俺は営業スマイルで笑いながら
握手する

『よろしくお願いします』

…なんだかチーフが俺を見ている気がする。視線を向けるとトロン

とした表情で見つめていた

八千代「ことりちゃん可愛い…お持ち帰りしてもいいかしら？」

『え、あの』

ダメに決まってるだろ。

唐突にチーフに後ろから抱きつかれた。

八千代「や〜ん 可愛い〜！きつとぽぷらちゃんと並んでうちの店の二枚看板になるわね」

チーフがギュッと抱きしめながらそんなことを言ってきた。

俺は野球の投手ですか

相馬「轟さん、ことりちゃんが困ってますからそろそろ放してあげては？」

八千代「あら、ごめんなさいね？」

チーフが苦笑いしつつ俺を解放する。

『えと、お…わたしはそろそろ帰りますね。そう嘛さん、色々あげがとうございました』

俺は礼儀正しくお辞儀する。

それから座っていた席から相馬さんからもらった帽子を被った

八千代「あら、もう帰るの？」

『はい、そろそろ帰らないとなずな…ちゃんが心配しますから』

相馬「ん？ことりちゃんは小鳥遊君の家に住んでいるのかな？」

『あ、はい』

『あ、はい。お姉さん達もいますし』

相馬「ご両親は？」

『か、海外でお仕事があつて…一緒に連れていっても仕事でわたし1人にするよりはいいだろうからって』

相馬「ああ、なるほどね」

再び嘘を並べながら相馬さんに答える俺。外面だけは愛想笑いを浮かべる。

『じゃあ、わたしはそろそろ行きますから。あ、ご飯ご馳走さまでした』

ペコリと御辞儀する。チーフが抱きしめたそうに小刻みに震えてるが、無視だ。

あれは気にしちゃいけない。

俺は若干ずり下がった帽子を直してからワグナリアを出る。

他の客にももの凄い見られたが気にしないことにする。ここに働くよ

うになれば死にたくなるほど見られるのは分かってるからだ。

それでも赤面してしまうのは慣れてないからだ。そう思うことにする。

さて…次は姉さん達か。

俺は金色の髪を風になびかせながらどう説明するか憂鬱になりながら帰路についた

8話へ

第7話（後書き）

轟さんに新たな趣味が芽生える？（笑）

次話予告。

ことりちゃん、姉達に弄られる。

予想通り？（え）

第8話（前書き）

複数の作品と同時進行ですので、どうしても遅れます
申し訳ありませんm（――）m

第8話

それから家に着く頃には夕方になっていた。幼女の歩幅だとかかなり時間がかかるな…出勤するときはバスを利用したほうがいいだろうか？

俺が小鳥遊家の家の前に着いたとき、ちょうど帰宅してきた一枝姉さんとエンカウントした。

し、しまったあああ！まだ何も考えてねええ！

俺が心の中で絶叫しつつフリーズしていると、一枝姉さんの方から話しかけてきた。

「一枝「ん？家に何か用かな？なずなの友達？」

『えと、あの』

俺はすっかり慣れてしまったプリティボイスを発しながら狼狽える。

「一枝「なずなに用事なんだろう、さっ、入りなさい」

『あ、ありがとうございます…』

俺は愛想笑いを浮かべながら一枝姉さんに促されて慣れ親しんだ我が家へはいる。

姉さんに敬語なんてすげえ違和感…

なずな「お帰りなさいお兄ちゃん…あ。」

出迎えたなずなが俺を見て挨拶するが、すぐ後ろに控えていた一枝姉さんを見て笑顔で固まった。

…説明の手間が省けたな

一枝「……で、だ。この子が宗太だなんてどういうことだ？」

なずな「ええと……」

場所が変わって小鳥遊家の居間。俺となずなが並んで座り、対面に一枝姉さんが腕を組んでメガネを光らせている。

その隣：俺の正面にはいつの間に戻ってきていたのか梢姉さんになり嬉しそうに頬染め（もちろん酒で酔っぱらってだ）ながら俺を興味津々に見ている

何だか蛇に睨まれたカエルみたいな気分だ。

そして2人の姉さんが座っているソファアの背もたれに腕を乗せて身をのりだしながら泉姉さんがうるうるした目を俺に向けていた。

そんな目で見るな

一枝「なずな」

なずな「…私も最初は信じられなかったけど、この子は間違いなくお兄ちゃんだよ」

なずなは意を決して言った

……妹にこの子と言われた……

「一枝「現実的にありえない話だな」

「一枝姉さんの意見ももつともだ。もし梢姉さんが男になって、自分がそつだと言つても俺なら信じないだろう

……ああ、敢えて梢姉さんを引き合いに出したのには追求しないで欲しい。決して今にも抱きつこうと目を輝かせているからではない。

……つて、俺は誰に弁明してるんだ？

「なずな」でもお兄ちゃんに間違えないよ。だって、私達家族しか知らないことも知ってるし」

「一枝「だが……いくらなんでも変わりすぎだろ」

「と言いつつ一枝姉さんが俺に視線を向ける。明らかに疑わしげな目だ

『……確かに一枝姉さんの言う通り信じられないかもしれないけど、俺は姉さん達の弟の宗太だよ』

「俺は深い青色の瞳で見据えながらはつきり言い放つ。

「梢「いいんじゃない？今の宗太はこんなに可愛いんだし」

「泉「……今の宗ちゃん……お人形さんみたいで……可愛い……」

「唐突に梢姉さんと泉姉さんが口を挟む。

って、泉姉さんもかよ

一 枝「だが…」

梢「もし仮にも、その子が宗太を語る別人だとしても、こんな
にちっちゃくて可愛い子が何か出来るわけないじゃない？」

可愛いは余計だ

泉「……………可愛いは…正義……………」

何だその理屈は

一 枝「……………反対してるのは私だけのようだな…分かった、好きにす
ればいいさ」

一 枝姉さんが深い深いため息を吐いてから咳くように言う

『ごめん、姉さん。でも俺は嘘は言っていないから』

一 枝「……………いや、信じるよ。何よりなずなが信頼してるしな、私
は職業柄どうしても疑ってしまうんだ」

姉さんがすまなそうな表情をしながら言う。

なずな「やったね、お兄ちゃん」

今までこの成り行きを見守っていたなずなが笑顔を向けながら抱
きつく。

む、胸が…！兄としては凄く複雑だぞ！

梢「あ、なずなズルい！アタシだって我慢してたのに！」

泉「……………ん」

そうばやきながら梢姉さんと泉姉さんが抱きついてくる…！

『や、やめ…！く、苦し……！』

俺は3人に揉みくちやにされ、今日一日の疲れが一気に出たのか段々と意識を失っていった…

なずなが何か言っているが気を失った俺には到底届かなかった

9話へ

第8話（後書き）

弄られると予告しつつ、揉みくちやにされるだけでした

次話予告。

ことりちゃん、さらに弄られる

18禁じゃないのももちろん性的な意味ではありません（え）

第9話

『あ…れ…?』

俺が目を覚ますと自室のベットにいた。

今までののが全て夢だったのかと淡い期待をするが小さい手と顔を垂れ下がる金髪が現実なのだと思いき知らされる

『はあ…』

口からついて出た声も自分の声でない鶴〇さんの声だ。

『ホントにどうしちゃったんだよな…俺』

そのまま寝ても仕方ないからと起き上がり、昼間に買ってきた女物の下着と着替えの服を用意する（今着ている服は昼間のままだった）

それから部屋を出ると今一番会いたくない人とエンカウトした。

梢「あら宗太、今からお風呂？」

『そつだよ。それがどうかしたか?』

俺がムスツとしながら見上げて答えると姉さんが頬染めて小刻みに震えていた。

人で萌えるなよ

梢「…だ、ダメよ宗太。今は女の子なんだから乱暴な言葉遣いしちゃう」

『他人の前ではちゃんとしてるよ』

着替えを抱え直して無然と答える俺。

どんなに不機嫌に顔をしかめてもこの容姿じゃどうしても可愛くなってしまうのが凄く嫌だ

梢「……………ねえ宗太」

『…な、なんだよ』

梢姉さんの目が妖しく輝く。凄まじく嫌な予感がする

梢「…久し振りにお姉ちゃんと一緒に入ろっか」

『はあ！？やだよそんなの！』

何を考えてるんだこの飲んだくれは！見た目は幼女（しかも美が付くほどの）だが、中身は健全な男子高校生だぞ！

梢「なんでよ？今の宗太は女の子じゃない。何を恥ずかしがってんのよ？」

『見た目はそうでも、中身は男のままなの！』

梢「でも、身体の洗い方は分からないでしょ？男と女じゃ肌の質が違うから今までと同じじゃだめよ？」

『それは…何となく分かるけど』

確かに男の時と空気の触れ方も違っていた。

だからと言ってこの年になって姉さんと一緒に入るのは恥ずかしく
ぎる！

『だ、大丈夫、何とか出来るよ』

梢「だーめ おねえさんが手取り足取り教えてあげるから」

『や、やめ！ちよ、あー！！』

閑話休題。

『……………もう、お婿にいけない……………』

梢「大げさね。それに今はお婿じゃなくてお嫁さんでしょうが」

それを言うな

なずな「お兄ちゃん、大丈夫？」

いつから居たのかなずなが俺を看病していた

『俺の心配をしてくれるのはお前だけだよ…』

なずな「…私もお兄ちゃんと入りたかったなあ」

前言撤回。お前もか。

『…疲れた…』

テーブルに突っ伏す俺に梢姉さんが腰に手を当てて呆れた表情をする。

梢「あのね、宗太。今からそんなんじゃないわよ？」

やっていきたくねえよ

俺が恨めしげな目を向けるとまた姉さんが小刻みに震えていた。

またかよ

なずな「お兄ちゃん…可愛いなあ…」

どこかうつとりした表情をしながらなずなが抱き締めてきた

『ちょ、お前もかなずな！』

なずな「お兄ちゃんが可愛すぎるからだよ」

なずなが俺の頬に頬擦りしてくる…

『はあ…』

俺はなすなに頬擦りされながら、こんな奇妙な生活がいつまで続くのだろうと深く深くため息を吐いた…

10話へ

第9話（後書き）

弄られ具合はイマイチだったかもしれませんが

次話予告。

ことりちゃん初出勤。

予定は未定ですm()m

第10話(前書き)

最近遅れぎみで本当に申し訳ないですm(_____)m

第10話

翌朝。起きたら男に…戻ってなかった。はい、今日も金髪幼女のみ
まです

『…今日は小鳥遊ことりとしての初出勤か…』

俺はむつくり起き上がり、パジャマを脱ぐ。ツルペタボディは今日
も健在だ。最も、一夜でロリ巨乳になったら凄く嫌だが。

それから一度全部脱いで裸になり、それからタンスに入れてある男
物の下着に手を伸ばしかけて…引っ込める。

『…つつい間違いでしまっな』

苦笑い浮かべつつ女物の下着を身に付ける。それからスカイブル
のワンピースを頭から被るようにして身に付けた。

それから部屋を出ると、最近認識を改めなければいけない人物とエ
ンカウンタした

なずな「あ、お兄ちゃんおはよ〜」

『…おはよう、なずな』

見上げながら挨拶する。

まさか妹を見上げるはめになるとは思わなかったな…

なずな「お兄ちゃん、今日も可愛いね」

『…………』

無言でため息をつく。

なずな「ダメだよお兄ちゃん。可愛い女の子が不機嫌にしてちゃ」

誰のせいだよ…可愛いは否定しないが。

なずな「ほら、朝食出来てるから」

なずなは俺の手を引いて連れていく。力でも妹には敵わなくなっていたので諦めて連行される

一枝「おはよう。なずな…宗太」

泉「…………おはよう…宗ちゃん…なっちゃん…」

梢「おはよ〜。宗太になずな」

俺達が居間に入ると一枝姉さんが一瞬間を置いてから俺に挨拶し、泉姉さんはボソボソと、梢姉さんは酔いどれ気味な口調と、三者三用な対応をした

ていつか梢姉さんは朝から酔っぱらってるのかよ

その点についてはいつものことなので敢えてスルーして食卓につく。

『ああ、そうだ。姉さん達になずな。家や他人のいない場では構わ

ないが、それ以外の場所では俺のことは小鳥遊家の従姉妹のことでありとして扱ってくれ」

一 枝「つまり…宗太ではなく、ことりと呼べと？」

『ああ。その呼び方だと色々不都合があるからな』

泉「私は…大丈夫…家…出ないから…」

それもどうかと思うけどな

梢「ことりちゃんが宗太だって知ってるのはあだし達以外にいるの？」

『…店長だけだな。何故かあの人だけは一発で見破った』

なずな「店長さんってあの背が高く髪が短いお姉さんだよ？わたしも分からなかったのに凄いなあ」

確かにあの人の野性的な勘は素直に凄いけどな

一 枝「まあ…私はお前の職場に行く機会もほとんどないし、外でも滅多に会わんから大丈夫だと思うけどな」

梢「ま、気を付けてれば大丈夫よ」

あんたが一番心配なんだ

『とにかく、そういうわけだから。あと学校にも行けないからその辺りの事もよろしく』

「一 枝「分かった。…それで…宗太。戻る見込みはあるのか？」

『ない。あつたらとつくに実行しているさ』

「一 枝「…たしかにそうか」

「一 枝姉さんが溜め息をつく。つきたいのはこっちだよ

梢「で、宗太。これからどうするつまりなの？」

梢姉さんが珍しく真面目な表情になって尋ねる

『どうしようもないからな、しばらくはバイトと家事かな？』

梢「えらいわね〜。いい子いい子」

さつきと一転して梢姉さんは右手を伸ばして俺の頭を撫でた

『や、やめるよ！』

梢「ちょっとくらいいいじゃない」

『だ、やめっ、はうっ〜』

精神が肉体に引き摺られたのか幼女みたいな声を出してしまった

…実際幼女なわけだが。

とにもかくにも波瀾に満ちた俺の幼女ライフ2日目^が幕を開けたの
だった…

11話へ

第10話(後書き)

次話予告。

ことりちゃん、初バイト(実際は初じゃないけど)。

更新は遅れると思います…すみませんm)——(m

第11話(前書き)

久々更新

第11話

『おはようございまーす!』

ワグナリアの事務室。結局今日は一枝姉さんの車に乗せて行ってもらって来た。

今の俺の足では倍近く時間がかかるからだ。徒歩でかかる時間を調べとかなくてはいけないな

八千代「おはよう、ことりちゃん」

杏子「お早う小鳥遊」

俺は一瞬店長がバラしたのかと思ったが、幼女のときの俺の名字も”小鳥遊”だったと思い出した

八千代「杏子さん、小鳥遊だと小鳥遊くと勘違いしてしまうから…どうにかありませんか?」

チーフが困惑顔で言った。まあ…チーフは店長が好きだからあまり大きく言えないのだろう

杏子「何をい…確かにそうだな。では他の皆のようにな”ことり”と呼ばせてもらおうか」

一瞬店長がバラしそうに見えたが気のせいということにしよう。そのほうが胃が痛くならず済む。

??「おはようござい…おや、見たことないガイジンさんが居ますねえ」

その直後、ワグナリアで会いたくない人物ナンバー1とエンカウントした

八千代「おはよう、葵ちゃん この子はね小鳥遊くんの従兄妹で、ことりちゃんっていうの」

山田「え？ガイジンさんなのに小鳥遊さんの従兄妹ですか!？」

山田が驚愕する。驚きすぎだ

八千代「見た目が外国人なのは母親がイギリス人だからよ」

山田「なるほど、ハーフさんですか…」

ジーツと俺を見下ろす山田。身長差があるから当然なんだが、なんかムカツク

八千代「何はともあれ、仲良くしてあげてね」

山田「はい！それはもちろんです！」

大きく頷く山田。俺は関わりたくねえ

それからチーフに案内され、女子更衣室へ。

壁の所々にへこみがあるのは例の彼女のせいだろう

ちなみに山田はすでに制服に着替えていた。…いつ着替えたんだヤツは。それから幸い、制服の構造はそれほど難しくなかったから1人でも着ることが出来た

サイズは…ほぼピッタリなのだが胸の部分が余る……もしかして！

『あの…着たんですが、胸の部分が』

八千代「うーん、やっぱりぽらちゃんのサイズだとそうなるわよねえ」

やっぱりー！せんぱいの制服キターー！

山田「ことりさん？どうしたんですか？」

『……はい？ううん、なんでもないデスヨ？』

…せんぱいの（予備だが）制服を着れたことに狂喜乱舞を内心でしている、山田に心配された。

かなり屈辱的だ

八千代「とりあえずぽらちゃんのサイズので我慢してね。本部にことりちゃんサイズの発注しておくから」

『すみません…』

俺が申し訳なさそうな表情をして頭を下げると、チーフが頭を撫でていた

八千代「いいのよ。背丈が小さいのはことりちゃんのせいじゃないし。……………小鳥遊くんの気持ちがあったような気がするわ……………」

撫でながらポツリと本音を溢した。

俺はロリコンじゃありません

杏子「今からミーティングするぞ。集まれ」

店長の一声で午前シフトのメンバーがバックヤードに集まってきた。

いよいよだ。俺は”小鳥遊ことり”としての初バイトに内心で心躍らせていた

べ、別に幼女化が気に入ったわけじゃないんだからな！ホントだぞ！

12話へ

第11話（後書き）

ちよっとツンデレが入ったことりちゃんでした（笑）

次話予告

ついにあの人登場？

更新は相変わらず遅めですm（|）（|）m

第12話(前書き)

今回は早めに投稿できました(^-^)/

8/15更新

第12話

杏子「……というわけで今日の報告は以上だ。…それとたかないや、ことり。自己紹介を」

店長の朝のミーティングをぼんやり聞いていると、唐突に俺を指名してきた

俺は緊張した面持ちで店長の隣に立つ。また自己紹介することになるとはなあ…

『え、えと、小鳥遊ことりです、こんなナリですが16歳です』

俺の一言に事情を知らないメンバーがざわめく。

八千代「ええっ！？ことりちゃんって16歳だったの!？」

あんたもか。

山田「ムム…私より年上…」

山田がなんかほざいたが無視だ

『あ、あと、よく質問されるかもなんで先に言っておきますが、ここで働いていた小鳥遊宗太とは従兄妹です』

さらにメンバーがざわめく。中には小鳥遊と仲良くすればことりちゃんとかいう気色悪い発言が聞こえたが聞かなかったことにしよう…前にもあったな、そんなこと。

『あと、見た目が外国人なのは母親がイギリス人だからです』

再びメンバーがざわめく。ま、分らんもないが

杏子「静かに！まあこのナリだから色々役不足になる部分もあるかもしれないが、その時はお前達でフォローするように。ミーティングは以上だ！では持ち場に戻れ！！」

店長の仕切りでミーティングは終了された。

この辺りが元ヤンのリーダーたる所以だろうか？統率力が半端ないと思った。

それから俺に与えられた仕事は研修バッチを付けてチーフの説明を受けつつホールの仕事をする事になった。

性別の差違はあるものの大半の部分は”宗太”だった頃と同じなので迅速かつ効率的に仕事をこなせた。

八千代「ことりちゃん飲み込み早いのね。かなり優秀だわ」

『ありがとうございます』

仕事の合間にチーフが誉めてきた

まあここで働いていたからな

??「ハンバーグセット五番テーブルだ」

唐突に佐藤さんからオーダーの品が出来たことを告げられる

別に今日が初めてのエンカウトではないが

佐藤「ほら、早くしろ」

『あ、はい！』

慌てて俺が取りに行くのと佐藤さんが怪訝そうな目で俺を見下ろしてきた

佐藤さんの身長差は歴然だった（男の時にも俺よりでかかった）からさらに見上げるかたちになる。

佐藤「お前は種島より低いからな、大丈夫か？」

やはりせんぱいより低いのか。

『種島って誰ですか？』

今の俺はせんぱいとは面識がないことになってるので、佐藤さんのせんぱいに対する印象を聞くついでに尋ねてみる

『お前と同じバイトで普通より小さい奴だ』

佐藤さんのせんぱいに対する印象はそれだけですか

佐藤「無駄話はいいからさっさと持っていき」

『あ、はい…』

俺は慌てて料理を運んでいった。ちなみにどのお客さんにも色んな種類の視線を感じた。なんで小学生が？みたいな怪訝そうな視線とかお人形さんみたいで可愛い〜みたいな女性客のかしませいのか金髪幼女テラモエみたいな男のしせ…いやいや、考えるな俺。これ以上は危険だ

それから慌ただしく働き、昼飯（自分で作った弁当…ちなみに幼女になってから今までの3分の1も食べられなくなった…弁当箱はなすが用意したピンクのかなり小さいタイプだ）を摂り、慌ただしく午後も働いて夕方。

???「おはようござ…あれ？」

ここで働けばいつかは会うだろうと思っていた人と従業員用入り口でついにエンカウトを果たした

13話へ

第12話（後書き）

今回は佐藤さんでしたm（――）m

次話予告。

ことりちゃんとおの人のワグナリア二枚看板？

あの人登場予定。

第13話(前書き)

話のつながり重視のため、次話以降から前書きと後書きはなしにします
m (|) m

……ぶつちやけネタが浮かばなくなってきたからですが

第13話

『おはようございます、せんぱい。今日も可愛いですね』

????「はい？」

人間とは恐ろしいもので。慌てると素が出てくるものだ

かくいう俺もいきなりのせんぱいと邂逅に”宗太”だった時の地が出てしまっていた

はい、説明口調なのは現実逃避してたからです

????「せんぱいって…」

だめだあ！よりによってせんぱいに正体がバレるなんて！！

????「ああー！！」

せんぱいがポンツと手を打つ。

終わった…

????「新しいバイトの子だね？」

……………せんぱいがアホの子でよかった。

そういえばよく考えてみたら、宗太の面影は全くないんだっす。すっかり忘れて…というか店長が気づいたのが異常なんだよな。

そう頭の中で考え事していると、せんぱいが何事も（実際にないが）なかったかのように笑いかける

ぽぶら「わたしは種島ぽぶら。よろしくね」

『えと、小鳥遊ことりです』

ぽぶら「かたなし?」

俺が自己紹介をしつつお辞儀すると、せんぱいが不思議そうな表情をして顔を傾けていた。

というか間違った名字呼びはわざとじゃなかったんですね…

ぽぶら「かたなしってかたなし君と同じ名字だね?」

『えっと、従兄妹なんです。あとこの髪と目の色は母親がイギリス人なので』

もう何度目かになるでっち上げの説明をせんぱいにもする。さすがに何回もだと慌てなくなっただな…

ぽぶら「すごい! ハーフさんなんだね」

せんぱいが憧れの眼差しで俺を見る。

『そんな大層なものでは』

八千代「ことりちゃんどうし…あら、ぽぶらちゃんおはよう!」

ぽぶら「八千代さん、おはようございます」

俺が戻ってこないことを心配したのか、チーフがやって来た

八千代「うんうん、そうして2人並んでると絵になるわね」

ぽぶら「はい？」

『……………』

俺とせんぱいを見てうつとりするチーフをせんぱいはきょとんとし、俺はうんざりした表情をした

やはり俺はせんぱいと同じロリなんですネ…

ぽぶら「じゃあわたし着替えてきますね」

せんぱいがつきつきしながら休憩室に向かっていった。

八千代「それじゃあことりちゃん、私達も持ち場に戻るわよ」

『あ、はい』

それから俺は慌ててゴミ捨てを終わらせ、チーフとともに持ち場に戻った

相馬「おはよう、ことりちゃん」

『おはようございます、相馬さん』

いつの間にか出勤していた相馬さんとバックヤードでエンカウントした

相馬「うん、制服姿もよく似合ってるね。可愛いよ」

『あ、ありがとうございます』

何かやっぱり男の頃と比べて相馬さんが優しい気がする…相馬さんってそっち趣味か？

相馬「ん？どうかしたかい？」

『いえ、なんでもないです』

俺が見ていたのに気づいたのか相馬さんがいつもの笑顔で尋ねてきたので、俺は曖昧な笑みで誤魔化した

相馬「そうかい？ホールの仕事は分からないからアドバイス出来ないけど、困ったことがあったら相談に乗るよ」

『あ、ありがとうございます』

やはり優しすぎる気がする…

「『いらっしやいませ！ワグナリアにようこそ』」

店内に俺とせんぱいの可愛い声が響きわたる。やはりというかなんというか…せんぱいと俺は相当目立っているようだ。口々に「アレって働かせていいのか？」と半ば心配する声やら、「可愛い〜まるで姉妹みたい」と黄色い声をあげる女子高生やら、「萌えっス

「萌え萌えっスよ先輩！」「とりあえず落ち着け」と異様に興奮するオタクデブ風後輩に不良痩せギス風先輩やらと。

…最後はなんだかアレだが。

とにもかくにもこれといって問題なく仕事をこなしていく。いままでの経験があるからむしろ効率よく動けてると思った

ぽぷら「ことりちゃん手際いいね 前にもウエイトレしてたことあるの？」

せんぱいが待機スペースに通りかかった俺に尋ねる。

『ええ、まあ…』

俺は愛想笑いを浮かべつつ答える

ホントはウエイターだけだな

ぽぷら「へー、小さいのにスゴいね」

せんぱい、自分の事忘れてませんか？

俺は愛想笑いを浮かべながら心の中でツッコミを入れた

こうして”小鳥遊ことり”としてのワグナリア勤務一日目が終わりに近づいていった

第14話(前書き)

ここにきて初のクロスオーバーです。場所が違うなどのことはご都合主義故なのでご了承下さいm()m

第14話

そんなおり、変な客が来店した。

???「ここがいいわ。この店で休憩してから不思議を探しにいくわよ!」

…不思議って。なんだか近寄りたくない連中だな

???「おいハルヒ。あんまり人前でおおっぴらにそんなこと言うな」

あの気の強そうな変な女はハルヒというらしい。俺は苦手なタイプだが結構な美人系だ。それをあまり冴えない男がたしなめている

ハルヒ「五月蠅いわねキヨン。そのどことが悪いのよ」

あの冴えない男はキヨンというようだ。…まああだ名だろうか

そんな連中に物怖じせずにはせんぱいは接客に赴く。

大丈夫だろうか…

ぽぷら「いらっしやいませ!ワグナリアへようこそ お客様は5名様ですか?」

せんぱいは気の強そうな女…ハルヒに近寄って営業スマイルで見上げる

…凄まじく嫌な予感がするのは俺の気のせいだろうか？

ハルヒ「……………」

ぽぷら「はい？」

ハルヒ「可愛いー！！なにこの子！まさかこんな所にみくるちゃん以上のロリっ娘がいるなんてー！！」

ぽぷら「ひゃわわわー！！お、お客様！？」

やっぱり！あの女よりによってせんぱいを思いっきり抱きしめてきやがったー！！

キョン「おいよせって！ハルヒ！」

????「はわわ、す、涼宮さん」

????「おやおや、困りましたね」

???'……………」

抱きしめるハルヒという女を回りの連中が止めに入る…というか実際に止めに入ってるのはキョンと言われていた男だけで、可愛らしい女の子はただただおろおろするだけだし、長身の優男風の奴はにこやかに状況を傍観してるだけ。…もう1人のショートカットの小柄な女の子は我関せずと言わんばかりに本を読んでいた。というか立って読むなよ

…しかたない、あの手の連中には関わりたくないがせんぱいを助け

るためだ

「あのお客様。申し訳ありませんが当店はファミレスであってそういう場ではありません」

俺がハルヒという女の前に直立して割って入る。

その瞬間、せんぱいを除く他の連中は硬直した

ハルヒ「……………」

キヨン「……………」

????「……………」

????「……………」

??「……………」

すると先程まで我関せずを通していた女の子までジッと俺を無表情で見つめている。

ハルヒ「……………も……………」

あ、ヤバ。嫌な予感再び……

ハルヒ「萌えー！金髪ロリっ娘よ！金髪ロリ！まさか漫画やアニメでしか見ないような特殊キャラを現実に見るなんて！」

と言いながらハルヒという女は目をキラキラ…いやキラキラさせながら俺に抱きついてきやがった…!

キヨン「んなアホな…」

???「はわわっ」

???「おやおや」

???「……………」

抱きしめられる俺をキヨンと言われていた男はひたすら啞然とした表情でポカンとし、可愛い女の子はおろおろし、優男は傍観、小柄な女の子は無表情で俺を見つめているだけだった。

15話へ

第15話(前書き)

長らくお待たせしたうえに短めで申し訳ありませんm()
m

第15話

八千代「お客さま。当店はファミレスですので…そのような行為は
ご遠慮下さいませ」

俺とせんぱいでは場を収められないと見かねたチーフが営業スマイルをたたえながらやってきた。

ハルヒ「えつと…ハイスミマセンデシタ」

ハルヒと呼ばれていた女がひきつった笑みを浮かべながら俺を開放する。…まあ、理由はわかるがな

すると五人が円陣を組んで何やらヒソヒソと話し始めた

ハルヒ「（ちょっとキヨン。あの人なんで腰に日本刀を帯びてるのか聞きなさいよ）」

キヨン「（なんで俺が！…気にならなくはないがそんなこと聞けるわけないだろうが！）」

???「（あ、あの日本刀って本物なのでしょうか）」

???「（物質の構成形式で刃物と断定できる）」

???「（では真剣であるか?）」

???「（間違いない）」

キヨン「マジかよ!?なんでそんなものをウエイトレスさんが?
!」

??「実に不可解。ゆえに興味深い」

…なにやら5人の声がだだもれなわけですが。まあ要するにチーフが帯刀しているのに困惑してるわけだな。

…俺も初めて見た時には驚愕したっけ。

なんてそれぞれ思い悩んでいると、せんぱいが5人に声を掛けてきた

ぼぶら「あの…お客さま?お席はこちらになりますよ…?」

せんぱいが小首を傾げながら恐る恐る話す…やはりせんぱいは可愛いなあ…と、俺がほんわかしているとハルヒと呼ばれていた気の強そうな女は再び自信満々な目を向けてきた
ハルヒ「悪かったわね。で、席はどこ?」

ぼぶら「こちらになります」

5人がハルヒという女の後ろに連れ立ち、せんぱいの案内で向かう。
…なぜか無表情な女は俺をジッと見ていた

八千代「ことりちゃん、大丈夫?」

せんぱいについていく5人を眺めているといつの間にか隣にいたチーフが心配げ(と言っててもいつもの糸目だが)な表情をしつつ声をかけてきた

「大丈夫ですよ、ちょっと驚いただけで」

八千代「そう？ならいいのだけど」

なおも心配げなチーフに笑顔で答えると顔を赤くして小刻みに震えていた。…最近こんな反応ばかりだな、疲れているのだろうか？

…それから。いくつか注文してそれを済ませた5人は松本さん（俺はあまり面識なくてよくわからない）の打つレジで精算している。

それを横目で見つつ他の客が使ったテーブルを拭いていると先程の無表情な女が話しかけてきた

??「………この仕事、終わるのはいつ？」

「えと、19時ですが…お客さま、それが何か…？」

??「長門有希」

「はい？」

有希「…私の名前。長門有希」

淡々とした口調で自らの名前を名乗ってきた。一体どういつつもりなんだろうか？

16話へ

第16話(前書き)

昨日からの連続投稿。ただし短いですm()m

第16話

有希「貴女の名前」

「え？」

有希「貴女の名前は？」

淡々とした口調で短く話すので思わず聞き返すともう一度 かつ、若干語尾を上げて話してきた。…というか話づらい人だな。よくあのメンツにいるもんだ

「えと、小鳥遊です。小鳥遊ことり」

有希「そう。じゃ、待ってるから」

「はい？あ、お客さま？」

俺が声掛ける間もなく無表情の女…長門有希は個性的なメンツの中に戻っていく。全くわけがわからない…ぽぷら「ありがとうございしました」

入り口にて出ていく5人をせんぱいが笑顔で見送る。…あんなことがあったのにせんぱいは健気だなあ…

八千代「ことりちゃん？」

「はい？なんででしょうか、八千代さん」

俺が再びほんわかしていると、チーフが話しかけてきた（ちなみに男の時と同じようにチーフ呼びしようかと思つてたが是非名前で呼んで欲しいと言われて渋々了解した。わけわからん）

八千代「とりあえず大体お客様が捌けてきたから休憩に入つていいわよ」

「え、まだ大丈夫ですよ？」

八千代「だめよことりちゃん。貴女かなり疲れてるでしょう？」

「そつでしようか？」

八千代「いいから。ここはまかせて休んでらっしゃい」

やんわりと説得してくるチーフに仕方なく休憩に入る俺。男の時よりはるかに作業量は少ないはずなんだが、体力が落ちてるんだろうか？

17話へ

第16話(後書き)

次話、中の人がボーカロイドなあの人が登場予定。

第17話（前書き）

なんだか待たせてばかりで本当に申し訳ないですm（――）m

先のネタが中々浮かばず、執筆が完全に止まっておりまして

第17話

「ふう…」

小さくため息ついて休憩室に入る。先程の無表情女：長門有希だっけか。俺の勤務時間を聞いてきたということは会いに来るつもりなのだろう。一体なんなのだろうか？

俺がひとしきり憶測の域をでない考えを巡らせていると慌ただし足音が聞こえてきた。

「???」「遅刻ちこ…く？」

ここに働くことになればいずれ会うだろうと思っていたがなるべく会いたくない人NO.2とエンカウトを果たした

そう、男の時に散々な目にあわされた怪力少女：伊波まひるだまひる「えと…お嬢ちゃん是谁かな？」

伊波さんがしゃがんで俺の目線に合わせながら尋ねてくる

「た、小鳥遊ことりです」

まひる「たかなし…？」

「従兄妹なんです」

伊波さんが怪訝そうな顔をするも、俺の次いだ言葉にホッとしたりような表情に変わる。なぜに？

まひる「でも小鳥遊さん」「ことりでいいですよ、宗にいと名字が被りますし」「じゃあ、ことりちゃん…でいいかな？」

「いいですよ」

まひる「それでことりちゃんはなんでココにいるのかな？」

伊波さんはまるで小学生を相手にするような優しい口調で話しかける。

「あ、今日からここで働かせてもらってるんです」「ほらっと立ち上がってからワグナリアのウェイトレスの制服を見せる。

まひる「え…？あ、そうか。種島さんみたいなタイプなのかあ…いるんだ…そういう子って…」

一瞬驚いた伊波さんだが、先輩のことを思い出して呟くように納得していた。

いや、先輩のケースは特殊だからな？

まひる「じゃあ私着替えてくるね」

「はい。あ、私はもう少ししたらあがりますので」

まひる「そっか…残念 私もことりちゃんと仕事したかったんだけどなあ」

俺は関わりたくない

それから伊波さんは更衣室に向かった。俺は再び今後のことを考える
とりあえず長門という女に会ってみるか…あれは何かありそうだし。

葵「ことりさん、そろそろ時間ですよ」

「あ、はい」

考え事していると山田に呼ばれる。さて、今日の勤務時間までもう
少しだ

…頑張るか

急かす山田に苦笑いを浮かべながら奴はどんな話をするんだろうと
色々と推測をたてながらホールに向かった

18話へ

第17話（後書き）

次話予告。

ことりちゃん、宇宙人とコンタクトする。（笑）

ハルヒを知ってる人ならわかるかも…って、知らない人のほうが多いかもですね（^| ^ ;）

第18話(前書き)

今回は早めに更新です

…その分短いです

第18話

有希「……あなたを待っていた」

「お待たせしてすみません」

ワグナリアでの勤務後。俺は先ほど来ていた奇妙な客と会っていた。

その場にはハルヒと呼ばれていた気の強い女以外は全員揃っていた

「お話とはなんですか？」

有希「……長門有希」

「はい？」

何故にそこで名乗る？

有希「……まずは自己紹介」

成る程ね

「えと、わたしは小鳥遊ことりです。…ええと」

自分が名乗ったあと他の3人を見る。キヨンと呼ばれていた男以外は名前知らんし…というかキヨンはあだ名だろうが

一樹「僕は古泉一樹です、よろしくお願いします」

見た目優男風の奴が名乗る。…なんか相馬さんとキヤラ被るな…
みくる「わたしは朝比奈みくるですう」

茶髪ロングのオドオドしていた女の子が名乗る。…今は落ち着いて
いるが…つまり深刻な事態には付いていけないタイプなのだろう

キヨン「俺は…まあ、みんなにはキヨンと呼ばれてるからアンタも
そう呼んでくれ」

最後にどこか無気力な男が名乗る。…何故にあだ名名乗り？

どうでもいいが、こいつはどこぞの銀髪天パな甘党侍と声が似てるな

「…では本題に入ってくれませんか？あまり帰りが遅くなると家族
が心配するので…」

俺が先を促すとおもむろに口を開いた

有希「…あなたには意図的に遺伝子情報が改変されているように
見受けられる。…あなたは何者？」

……は？遺伝子？

「言っている意味が分からないのですが…」

有希「…遺伝子の一部…染色体の変質が見受けられる。原因は不明。
だが、Y染色体が存在した痕跡が観測された」

……ええと…つまり…？

古泉「染色体：たしか医学的な検知で性別を決定付けていた部分でしたか。僕の記憶が正しければ、XX染色体：つまりX染色体のみで構成されていれば女性、XY染色体：Y染色体が半分入っていれば男性：だったはずです」

優男風の奴：古泉一樹が真剣な表情で捕捉説明する

……え？なんか嫌な予感が……

有希「……原因は不明だが、この人物は男性だったと推測される」

……ば……バレたあああ……！！！！

19話へ

第18話（後書き）

次話予告。

ことりちゃん弁解する

感想いただけたらモチベーションが上がって早くなるかも…冗談で
す、催促してすみませんm(_____)m

第19話(前書き)

間違いがありましたので修正しました

第19話

キョン「いやいや、待ってくれ長門よ。この子が男？とてもそうは見えないぜ？」

キョンがそんなバカなと言わん表情で無表情女…長門さんに反論する。ま、普通は信じられないわな

有希「でも事実。この者には遺伝子情報が改ざんされている。元の姿は予測できないがそれほど大差ないはず」

大差あるから！ありすぎるから！

俺が心の中で絶叫していると、キョンがどこか軽蔑した目で見た。ちょ、なりたくてなったわけじゃないぞ！

有希「失礼する」

そう淡々と言い放ち、長門さんは俺の額に右手を当ててきた。ひんやりとして気持ちよかった

有希「…おかしい。遺伝子情報の改ざんは確認できたが、記憶情報では確認出来ない」

キョン「あー…わかりやすく説明してくれ」

有希「この者自身による意図的な改ざんはみられない」

樹「つまり長門さんが言いたいのは自らすすんでやったというわけ

ではないということですね」

あたりまえだ。男が好き好んで女になるわけないだろう…アッチ系なら別だが。

キヨン「ということは…突然変異、か」

有希「間違いない」

「あの…それで私はどうしたら」

おずおずと右手を挙げながら聞いてみる

キヨン「お前は戻りたくないのか？」

「戻れるなら戻りたいですよ。…原因がわからないので戻りようがないですが」

小さくため息をつく。精神までが幼女に近づいているせいか、泣きたくなってくる…

キヨン「長門、おまえならどうにかできるんじゃないか？」

なんですと？

有希「できる」

キヨン「それなら」でも現状では不可能「…は？」

有希「この者の遺伝子情報が故意ではないとはいえ、改変がみられ

る以上はさらなる操作は遺伝子の崩壊の可能性が高い」

キヨン「あゝ…つまりだ、一度いじってあるからまたいじると命に
関わる…てどこか」

キヨンの問い掛けに長門さんは無言で頷く。なんだ、結局無理なん
じゃないか…

キヨン「あゝ、なんというか…色々期待させて済まなかったな」

「いえ、とりあえず信じていただけで何よりです」

キヨンが申し訳なさに苦笑したのでこちらも苦笑いで返す。期待
もたせやがってコノヤロウ

キヨン「…まあ、なんというか、こっちでもほかに方法を探してみ
るから…期待しないで待っていてくれ。じゃあな」

「はあ、色々ありがとうございませす」

キヨン達が最後にすまなそうにしつつ去っていった。

…本当になんなのだろう、あいつらは。

…段々薄涼しくなり始めた帰り道を歩く。まだ夏真っ盛りだが、そ
れでも北国の夏の夜は得てしてこんなものだ

??「あれ、ことりちゃん?」

聞き覚えのある声に振り返るとせんぱいが佇んでいた

ぽぷら「今帰り？よかったら途中まで一緒に帰らない？」

「いいですよ」

せんぱいの問い掛けに二つ返事で了承する。特に断る理由はないからな

ぽぷら「ことりちゃんはどこに住んでいるの？」

「お…じゃなかった、宗にいのところですよ」

ぽぷら「宗にい…かたなし君の所？」

「はい」

ぽぷら「ことりちゃんってかたなし君の従妹なんだっけ？あまり似てないよねえ」

…そんな感じでせんぱいが振ってくる話題に相槌を打ちつつ分かれ道にさしかかる。

ぽぷら「じゃあことりちゃん、わたしはこっちだから。また明日ね」

「はい、お疲れさまでした」

大きく手を振りながら走り去るせんぱいに深々とお辞儀する。

「ふう…色々と疲れたな」

色んな意味で。せんぱいや伊波さんとの遭遇、涼宮ハルヒという変な女との邂逅、長門とかいう女に性転換したことが一発でバレたりとか…普通は気付かないはずなんだがな…

？「こ・と・り・ちゃ〜ん」

「によわ〜!？」

突如後ろから何者かに抱き締められる……確認するまでもなく小鳥遊家の酔っ払いこと梢姉さんだ

「い、いきなりなんですか梢姉さん!」

梢「あらダメよ。”ことりちゃん”は私の妹じゃないでしょう?」

ああもうややこしい!こんなときばかり従姉妹ポジションになるんだから!

梢「怒った顔もかわい〜」

「ちよ、姉さんっ」

必死に暴れるが今の俺の身長は梢姉さんのお腹くらいまでしかないためにびくともしない。

この怪力女め…

梢「ま、それはともかくとして…一緒に帰りましょ。”ことりちゃん

可愛いから変質者に襲われないと限定らないし」

怖いこというな。可愛いのは認めるが…って、”自分が”だったな…

梢「何してるのことりちゃん。いくわよ」

「わ、ちょ、ま」

そして俺は何故か梢姉さんにおんぶされながら帰宅したのだった

20話へ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1987m/>

WORKING! ?

2011年11月26日01時52分発行